第八四回　東洋文化講座（二〇一四年一〇月二八日）

「異人」イメージの政治性：一八―一九世紀の清王朝と中央アジアの事例から

小沼孝博

一六九〇年における本格的な軍事衝突をきっかけとして、満洲人の為政者が主体をなす清朝（一六三六―一九一二）は、天山山脈の北部を拠点とするオイラト遊牧民の部族連合、すなわち遊牧国家ジューンガルと、内陸アジアの覇権をめぐって対立することになりました。それから六五年を経た一七五五年、ついに清朝はジューンガルを滅ぼし、続けて一七五九年には天山山脈の南方に位置するタリム盆地周縁のオアシス地域（カシュガリア）をも征服するに至りました。この一八世紀中頃の一連の軍事行動によって清朝が獲得した領域は、のちに「新しい領域」を意味する「新疆」と呼ばれるようになります。そしてこの軍事行動の結果、清朝の支配領域は最大に達し、中央アジア[1]における清の存在感は一気に高まることになりました。

さて、今年度の学習院大学東洋文化研究所の東洋文化講座は、「アジアの未知への挑戦――人・モノ・イメー

ジをめぐって」という全体テーマが設定されています。「未知への挑戦」という点に着目すれば、清朝はこの時代、中央アジアという未知なる空間に足を踏み入れ、支配下に置いたカシュガリアのテュルク系のイスラーム教徒（ムスリム）だけではなく、さらに西に居住している多様な人間集団と出会うことになりました。また逆に、中央アジアに住む人々も、これ以降、清朝といろいろな形で関係をもつことになりました。お互いに自分たちとは違う、未知なる「異人」と相対することになったわけです。

近年、清朝史研究への関心の高まりと一次史料へのアクセス向上は、清朝と中央アジアの関係のとらえ方に再考をうながす契機を与え、古典的な、あるいは通説化した歴史像は改められつつあります。本講演では、それらの新たな見解をふまえながら、相互の他者認識、つまり清朝と中央アジアの人々がお互いをどのような存在としてイメージしていたのか、という問題を考えてみようと思います。

一、清の中央アジア進出

まず、清朝が「新しい領域」の獲得をどのように評価したのか、という問題から話を始めます。一七五九年末、清朝に対してカシュガリアで最後まで抵抗を続けていたカシュガル＝ホージャ家の指導者兄弟が逃亡先のバダフシャンで殺害されたという報告が、北京に届きました。これを受けて乾隆帝（在位一七三六―九五）は、ただちに「回部」（カシュガリア）の平定を内外に宣布するのですが、そこで次のように述べています。

さきに大兵がジューンガルの各部をことごとく平定し、我々の版図に組み入れた。さらに東西のブルト（ク

ルグズ）と左右のカザフの人々もみな帰順した。ただ逆賊たるホージャ＝ジャハーンの兄弟が〔我の〕恩に背いて反乱を起こしたため、派兵して〔彼らの〕罪を問うべく討伐せざるをえなかったのである。……これは決して兵力を費やして戦争をやめないことを好んでいるのではない。……アンディジャンやバダフシャンなどのムスリムは、〔我の〕恩に感謝し、威光を畏怖することを理解し、みな心から帰順した。そしていま、命令に遵い、逆賊の首級を献上してきた。これにより、辺境の地は安泰となり悪事がなくなるので、諸部の人々は安逸に暮らすことができるであろう。威徳が遠方の地にまであまねく伝わったことは、みな上天の庇護、宗社の恩福によるものであり、いまここに皇祖と皇考が成就できなかった事業を継承し、完遂することができたのである［『平定準噶爾方略』正編巻八一、一三a―一四a］。

ジューンガル征服を皮切りとする遠征事業の完遂を、乾隆帝は祖父の康熙帝（在位一六六二―一七二二）と父の雍正帝（在位一七二三―三五）が成しえず、かつ中央アジアに安泰をもたらす偉業として誇っています。さらにその後、まさに自画自賛するかの如く、ジューンガルの征服と「新しい領域」の獲得を記念する戦記や地誌の編纂、寺院や記念碑の建立、地図・詩文・絵画・版画等の作製が相次ぎ、征服と支配の正当性が声高に主張されていくことになりました［Perdue: 409–494; Waley-Cohen: 23–47］。この王朝主導の文化プロジェクトの結果、新疆征服は乾隆帝の「盛世」を最も象徴する事業として位置づけられるようになり、のちに新疆は清朝政権において「祖宗偉業の地」とみなされるようになります。

この文化プロジェクトで生み出された「作品」の中には、清朝公定のジューンガル戦記である『平定準噶爾方略』、中央アジアの地理・風俗・言語に関する情報を集積した『欽定皇輿西域図志』、『欽定西域同文志』、『御製

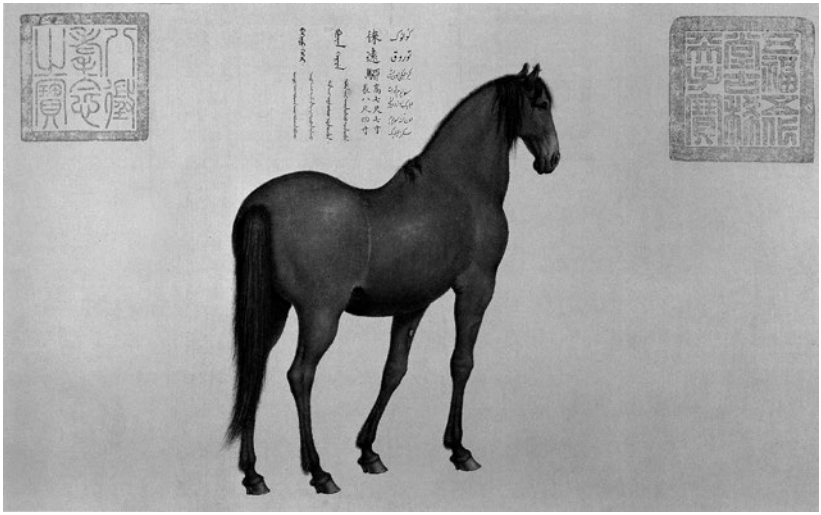

図１　「愛烏罕四駿」（部分）

上部には左からモンゴル語、満洲語、漢語、テュルク語で馬の名と大きさが記されている（国立故宮博物院蔵品）。

五体清文鑑』などが含まれており、それらは現在でも研究の基礎文献として利用されています。また、清朝政権の中央アジア観という点で注目すべきは、ヴィジュアルな美術作品の数々です。例えば、東西文化交流の側面でも注目される「平定準噶爾回部得勝図」（パリ作成）は、新疆征服の名場面を一六枚の銅版画で描いたものです。朝貢した周縁部や外国の人々の容姿を描いた「皇清職貢図」にも、中央アジア各地の民族集団が含まれています。

さらに、ジュゼッペ＝カスティリオーネ（Giuseppe Castiglione：郎世寧）が描いた「哈薩克（カザフ）貢馬」（パリ・ギメ美術館蔵）、「愛烏罕（アフガン）四駿」（台北・国立故宮博物院蔵、**図１**）をはじめ、中央アジアの有力者から乾隆帝に献上された名馬の絵画が複数残されていることも興味深い点です。一説によれば、乾隆帝は無類の馬好きであったといわれていますが、それら中央アジア産の馬を描いた絵画には別の意味も込められているようです。これを考える上で

重要となるのが、ジューンガル征服後、カザフ遊牧民の「帰順」を記念して乾隆帝が詠んだ「御製哈薩克内属遣使進貢詩」[『欽定皇輿西域図志』巻四四、九b―一〇b]です。それは以下のようなフレーズから始まっています。

哈薩克即大宛也、従古不通中国、漢武労師動衆、僅得其馬、猶且動色頌功、斯何称焉。

[訳文] カザフとはつまり大宛である。[2] いにしえより中国とは通交がなかった。漢の武帝は軍隊を苦しめ、民衆を動員して、わずかにその地の馬を獲得しただけであったが、顔色を変えて喜び、その功績を讃えた。これをどうして功績と称せようか。

古代中国において「西域」と呼ばれた中央アジアは、良馬の産地として知られていました。乾隆帝がこの詩文でも述べているように、漢の武帝が名馬「汗血馬」を獲得するために西域の大宛国に軍隊を派遣したというのは、よく知られた故事です。清朝に「帰順」した中央アジア諸勢力から献上された馬とは、乾隆帝にとって、自らの威光は古代中国の帝王をも凌駕する、ということを示すシンボルだったといえるでしょう。

ただし、繰り返しになりますが、この文化プロジェクトで作成された作品から窺えるイメージとは、必ずしも清朝と中央アジアの関係の実態を示すものではありません。むしろ、清朝が思い描く「帝国ヴィジョン」のなかで、中央アジアはいかなる存在であるべきかを概念化するために生み出されたといったほうが正確です。当然ながら、これら作品は清朝政権の政治的なメッセージが色濃く反映したものであり、事実、作為的な情報操作の痕跡を随所にみいだすことができます。

例えば、一八世紀後半（乾隆朝中後期）に作成されたといわれる「万国来朝図」には、ヨーロッパや東南アジア諸国、琉球の人々とともに、中央アジア各地から来朝した「朝貢使節」が描きこまれています［東博二〇一二：二八六―二八七、三四五］。一見、北京の紫禁城内で乾隆帝への参賀を待つ人々の様子を描いているかのように思えますが、実はここに描かれた宮殿の配置や構造、背景に見える風景は、現実の紫禁城のそれと一致せず、現在まで場所は特定されていません。また、「荷蘭（オランダ）」「法蘭西（フランス）」「英吉利（イギリス）」「瑞典（スウェーデン）」、さらには「日本」といった、当時の北京にそろって朝貢に来るはずのない国々からの使節が一堂に会しているのです。要するに、「万国来朝図」は、現実には存在しないフィクションとしての一場面を描いたものなのです。いいかえれば、清朝政権がそうあってほしいと思い描いていた、周辺諸国・諸民族の清朝に対する姿勢を可視化したものだといえるでしょう。

また、カシュガリア征服後、「回子」と呼ばれた現地のテュルク系ムスリムが三〇〇名ほど強制的に北京へ移住させられました。このムスリム居住区は、北京の人々から「回子営」と呼ばれるようになります。新たな臣民である「回子」のため、乾隆帝は回子営内にモスクの建設を命じ、完成したモスクの敷地内には乾隆帝自らがモスク建設の縁起を説明した「御製勅建回人礼拝寺碑」が立てられ、それは漢語・満洲語・モンゴル語・テュルク語の四言語で刻字されていました。この碑文の中で乾隆帝は次のように述べています。

> いにしえの史書を調べてみると、回紇は隋の開皇という時代に初めて中国に入った。唐の元和の初め、摩尼（マニ）［教徒］が進貢した時に、請奏して太原に寺を建て、「大雲光明」という扁額を掛けさせた。これがすなわち、礼拝寺建立の嚆矢である。

「回紇」（古代モンゴリアの遊牧ウイグル人）が、隋の開皇年間（五八一―六〇〇）にはじめて朝貢したとする歴史的事実は存在しません。そもそも開皇年間に隋と対立していたのは突厥であり、「回紇」はまだ九姓鉄勒（トクズ＝オグズ）の一部として認識されるだけの存在でした。ただし、ここで重要なことは、乾隆帝の歴史理解が正しいかどうかではなく、漢字の「回」を含んでいるという点から、当時の「回子」をかつての「回紇」に結びつけ、「回紇」を中国に最初に入ったムスリムとみなしていることです。さらに、実際に「回紇」の使者としてマニ教の僧侶が唐に来朝し、マニ教寺院[3]が建立されたのは事実なのですが、この碑文のテュルク語面では、「摩尼（マニ）」に対して、イスラームの法や教義に精通した人物を指す「ムッラー」（*mullā*）の訳語があてられています。すなわち、乾隆帝の理解では、唐代に「回紇」のために建立した「礼拝寺」とは、イスラーム教のモスクにほかならないのです。これは、為政者が新たに加わった臣民に対して支配の正当性を示すためにおこなった歴史の読み替えの顕著な一例といえるでしょう［小沼二〇〇九：四二―四三］。

二、清朝と中央アジアとの対話

一八世紀中頃の西方進出の過程で、清朝は中央アジアという未知なる世界に踏み込みました。清朝はその地に居住する多様な人間集団と交渉をもつことになり、各集団の支配者たちとの間に書簡の往来を通じた対話が成立します。この局面で特筆すべき点は、当初そこに漢文文書が介在していなかったことです。

明朝（一三六八―一六四四）の初期、王朝の翻訳機関である四夷館のもとに、中央アジアとの交渉を担わせるペルシア語文書の翻訳機関である回回館が設立されました。清朝前半期にも回回館は存続していたようで、台北

の中央研究院傅斯年図書館の「内閣大庫檔案」コレクションには、回回館の訳字生であった李三台という人物が作成した、漢字二〇文字に対応するペルシア語を併記した文書（試験答案の類か？）が残されています［「内閣大庫檔案」一八六七二九―一］。しかし、清代における回回館の実態はほとんど不明で、そのうち有名無実化し、自然消滅してしまったのではないかと考えられます。

西征の過程で中央アジアが清朝の戦略的視野の中に入ってくると、この状況に変化が生じます。一七五五年のジューンガル征服の直後、乾隆帝は、新附のオイラトやテュルク系ムスリムへの勅書は彼ら固有の文字で記すべきであるという見解を示します。しかし、当時の北京には、トド文字モンゴル語（オイラト語）やアラビア文字テュルク語（チャガタイ語）を書く能力を持つ者はほとんどいません。そこで乾隆帝は、前線で指揮をとる将軍に、書写に長ける現地の人材を家族とともに北京に送致するよう命じました［「軍機処満文上諭檔」軍務三―一七（一）、乾隆二〇年九月一六日条］。翌年に清朝政府は、テュルク語やペルシア語の書写能力をもつ人材を養成するため、「回子官学」を紫禁城内に設立しました［Brophy 2013］。回子営のテュルク系ムスリム住民も、書記や通訳として、清朝の辺境統治や対中央アジア交渉にたずさわりました。

中央アジア政策を展開するに際して、清朝は積極的に内陸アジア的な概念を活用し、漢文化（中国文化）にかかわる側面を意識的に排除していた感があります。少なくとも乾隆朝においては、新疆駐在の行政官は、貫徹はされていませんでしたが、満洲語で上奏文を起草することを求められました。一七六三年に発した上諭の中で、乾隆帝は「もしも〔新疆駐在の行政官が〕満洲語を体得していなければ、彼らは満洲〔人として〕の体面を失い、きっと〔カシュガリアの〕ムスリムやカザフに笑われることになるだろう」［『高宗実録』巻六九八：一一a―b］と述べています。この時代、満洲語能力の低下など、満洲人の「民族的特性」の喪失がしばしば問題視されまし

たが、それと同時に清朝政権は、中央アジアのイスラーム文化圏に存在したであろう、漢字や儒教に代表される漢文化を忌避する空気をきちんと理解していたのかもしれません。

もう一つ、清朝の中央アジア政策の基本にかかわる重要な側面がありました。一七六一年に清朝政権は、カシュガリア各都市の現地ムスリム行政官のトップにあたるハーキム＝ベグの官印を鋳造します。主要都市に駐在する清朝大臣の官印が、左から満洲文字・アラビア文字（テュルク語）・漢字という三種の文字で鋳刻されているのに対し、ハーキム＝ベグの官印は満洲文字・トド文字（オイラト語）・アラビア文字になっています。漢字ではなく、ジューンガルが利用していたトド文字が採用されている点からは、清朝がカシュガリアのムスリムを統治するにあたり、かつてその地を属領にしていたジューンガルの存在を強く意識し、自らをその統治権を継承する存在として位置づけていたことがわかります［小沼二〇一〇：一九五］。

一八世紀後半、清朝皇帝が中央アジアの支配者たちに勅書を送付する際は、満洲語で記された正文に加え、テュルク語やオイラト語の翻訳が作成されました。現在、ほぼ完全な状態で残されているものは、一七八八年にコーカンド＝ハン国のナルブタ＝ビィ（在位一七六八／六九―九八／九九）宛に起草された乾隆帝の勅書です。遼寧省博物館に所蔵されているこの勅書は、横一六一五ミリ×縦九四五ミリの大きさをもち、左から満洲語・オイラト語・テュルク語の三言語で書かれています。時間の都合上、本講演では勅書の内容には踏み込むことはいたしませんが、満洲語面の冒頭は、「天命により時の運行を承る皇帝の勅」（*abkai hesei forgon be aliha hūwangdi i hese*）という定型句から始まっています。これに対応するテュルク語面の部分は、「神の命により時をつかさどる皇帝の勅」（*khodāning farmāni bilä waqt-zamānni igälägän pādshāhning yarlighi*）となっています。驚くべきことに、清朝皇帝の言葉は、神の名のもとにおいて中央アジアのムスリムに伝えられていたのです。

続いて、清朝皇帝の勅書そのものの影響力について考えてみましょう。ウルムチにある新疆ウイグル自治区檔案館に、康熙・雍正・乾隆の三帝がオイラトの一支であるトルグートのハンに与えた満蒙合璧の勅書三件が収蔵されています。康熙勅書は、その貴重な遣使録である『異域録』（満洲語書名：*Lakcaha jecen de takūraha babe ejehe bithe*）を著したトゥリシェン（図理琛、一六六七―一七四一）が加わっていたインジャナ使節が、一七一二年にヴォルガ河流域に到り、トルグートのアユキ＝ハンに手渡した歴史的な勅書です［馬・郭一九八四］。雍正勅書は、一七二九年にマンタイ使節がアユキの息子であるツェレン＝ドンドゥク＝ハンに手渡したものです［馬・馬一九八八］。この二件の勅書は、ツェレン＝ドンドゥクの息子であるウバシ＝ハンが、一七七一年に部民を率いて天山北部のジュンガリアへ帰還した時に携えてきました。その後、一七七一年にウバシが受け取った乾隆勅書をあわせた三件の勅書は、一九七九年に「発見」されるまで、トルグートの歴代ハンの家廟に大切に保管されてきました。

清朝皇帝の勅書の効力を、中央アジアの支配者たちは様々な形で利用しようとしました。勢力拡大を試みていたコーカンド＝ハン国の支配者イルダナ＝ビィ（在位一七五八？―六八／六九）は、一七五九年末に清朝の使節がはじめて到来した際、周辺のクルグズ諸部族を統治する権利を保証する勅書の発給を要求し、さらに多くのクルグズを従わせようとしました［小沼・河原・塩谷二〇一四］。また、一七七七年にカザフ中ジュズのハンであるアブライは、偽造あるいは内容を詐称したと思われる清朝皇帝の勅書を、彼の配下の人間にもたせてタシケントに派遣し、その地の住民から税を徴収しようとしました［小沼二〇一四：二一八―二一九］。

一八六七年にカシュガルで樹立されたヤークーブ＝ベグ（一八二〇？―七七）政権に参加した経験をもつムッラー＝ムーサー＝サイラーミーは、後年に著した『ハミード史』において、次のようなエピソードを伝えています。

清朝統治下でベグ官人に任命されていた現地ムスリム有力者やその子孫の多くは、ヤークーブ＝ベグ政権下で平民の扱いを受けることになりました。しかし、清軍が新疆を再征服すると、彼らは清朝皇帝が祖先に与えた勅書（ヤルリグ）（おそらく任命文書）を所有していたため、その地位を回復できたというのです［TH/J: 25b–26a; TH/Z: 61–62; TH/Ä: 146–147］。

以上の各事例からは、清朝皇帝から与えられた勅書は、中央アジアの有力者にとって地位や身分を保証し、さらには自身の権力行使の正当性を保証する証拠にもなりうるものであったことがわかります。勅書の存在そのもの、およびその所有が、彼らにとって高い重要性をもっていたことが窺えます。

一方、中央アジアから清朝へ送付された書簡は、北京や台北の研究機関に数多く保管されています。ここでは、清朝政府におけるそれら書簡の翻訳のあり方に注目してみましょう。一七六〇年にコーカンドのイルダナがヤルカンドの清朝大臣に宛てたテュルク語書簡には、「我々の命のある限り、世界の保護者たる王（シャー）に友好と友誼を示し、我々の言葉は違えられることがない」という、清朝皇帝との友好関係を謳った一文がみられます。ところが、ヤルカンドの清朝当局が作成した書簡の満洲語訳では、この一文は「我々は代々、みな大エジェンの臣僕（アルバト）となった。すべてにおいて〔清朝皇帝に〕従っておこなう」となっており、コーカンドの支配者による清朝皇帝への臣従の表明というニュアンスが前面に押し出された形に改められています［小沼・河原・塩谷二〇一四］。

カシュガリア諸都市を支配下に置き、トルファンとウルムチをも制圧したヤークーブ＝ベグは、一八七一年に同治帝（在位一八六一―七五）に宛ててテュルク語の書簡を差し出します。その書簡のなかでヤークーブ＝ベグは、それまでの自身の行為について人知を超えた「神の恩恵」による当為であると説明し、新疆の征服と統治の正当性を主張しています。ところが、やはり清朝当局側が作成した漢文訳では、それらの行為は「天意」にかかわる

ものと説明されています。イスラームにおける唯一神アッラーに関連する事象は、中国世界において「天」という字義をともなって表現されることが多々あります。それはイスラーム教における「神」と中華思想における「天」がともに具有する絶対性・普遍性を反映していると考えられますが、ひとたび「天」と関連づけられると、おのずと中華の世界観の中で把握がなされることになります。すなわち、清朝側の論理からすれば、「天下」において「天意」をつかさどっている存在は「天子」たる清朝皇帝にほかなりません。であるならば、「天意」によってヤークーブ＝ベグが獲得した領域は当然清朝皇帝に返還せねばならない、という主張が導き出されることになります。清朝側は、イスラームの論理で裏打ちされていたヤークーブ・ベグの言説を、自身の論理に沿った形で解釈しなおしているわけです［新免・小沼二〇一二］。

以上の諸事例が示すように、清朝政権における翻訳作業の過程では、中央アジア側の言説に対して、清朝側の都合に応じた解釈の変更が往々にしてなされていました。もちろん、清朝から書簡を受け取った中央アジア側においても同様の翻訳操作はなされたでしょうから、「おあいこ」といったところだと思います。

三、「異人」に対するイメージ

伝統的に中国の知識人には、内外の異族集団の起源を、かつて中国になんらかの関連をもっていた集団に求める傾向があります。清代においても、『嘯亭雑録』を著した昭槤は、「フンカル」（オスマン朝）の民について、西遼（カラ＝キタイ）の後裔ではないかという見解を披瀝しています［昭槤一九八〇：五二―五三］。また、関係が深かったロシア人についても、清朝ではヨーロッパ人ではなく、内陸アジアの民として扱っていま

した。モンゴル・チベット・新疆など、清朝治下の内陸アジア地域の行政官を歴任した蒙古旗人スンユン（松筠、一七五二―一八三五）は、満洲語で著した『百二老人語録』（満洲語書名：*Emu tanggū orin sakda i gisun sarkiyan*）の中で、ロシア人について次のように述べています。

> ロシア人とは、もともと回子（テュルク系ムスリム）と同族のようであるが、回子のように豚肉を食べる人々ではない。……〔ロシア人の〕衣服は西洋の地と同じである。彼らの土地には西洋の地の人々がおり、しかも西洋の教えを尊崇している［Sungyun 1982: 416–418］。

中国における「西洋」とは、もとは中国本土からみた西の海、つまりインド洋海域世界を漠然と指す概念であり、その地域に住む人々が「西洋人」でした。ところが、その「西洋」に次第にヨーロッパ人が進出し、インド洋・東南アジア沿岸の植民都市を経由して、明末には中国の東南沿海に渡来するようになります。清朝前半期、「西洋人」は海を渡ってやってくるヨーロッパ人を指す用語となり、康熙帝などは清朝宮廷に仕えたイエズス会士を「西洋人」と呼んでいます。スンユンの説明によれば、ロシア人とは、ヨーロッパ文化を好み、それを受け入れてはいるけれども、本質はヨーロッパ人ではなく、新疆のテュルク系ムスリムに近い人々なわけです。現在の日本人からすると不思議に思われるかもしれませんが、このようなロシア人に対するイメージは、なかなか払拭されず、清末に至っても根強く残っていました。一八八七―八八年にロシアへ視察のため派遣された遊歴官の繆祐孫は、帰国後の報告書のなかで、ロシア人は「吐蕃」（古代チベット）の子孫であり、コサックは「突厥」の「可薩」（ハザール）の子孫であると述べています［佐々木二〇〇二：一三二］。

さて、すでに述べたように、乾隆帝は新疆の「回子」を、かつてモンゴリアにいた「回紇」に結びつけて理解していました。この理解は清朝の時代に生きた人々に広く受け入れられていたようです。一七八〇年、乾隆帝の七〇歳の誕生日を祝う式典に参加するため、朝鮮王朝の使者（燕行使）の一員として朴趾源（パクチウォン）（一七三七―一八〇五）が派遣されました。滞在中のある日、朴趾源は、「破老回回図」という、中国内地育ちのモンゴル人官僚（おそらく蒙古旗人）と知遇をえました。二人の会話の中に、次のようなやりとりがみられます。

ちょうどその時、数人の回子が〔お茶を〕飲みに入って来た。私は〔破老回回図に〕「彼らもまた西番（チベット）の部民ですか？」と尋ねた。〔破老回回図は〕「ちがいます。回子とは、すなわち唐の時代の回紇です。唐に対して功績もありましたが、中華にとって大きな憂いでもありました。また回鶻ともいいます。五代の時期に西に移動して突厥を侵略し、ついに漢の西域故地を占拠するに至りました。彼らの清真教（イスラーム教）もまた〔中国における〕異端の教えの一つです。」と答えた[4]［朴一九九六：三五五］。

近代における民族名称としての「ウイグル」は、ソ連の「民族的境界画定」作業の一環として、一九二一年にソ連領内に居住する新疆出身者の代表者を集めたアルマアタ会議の席上で採用されました。[5] ただし、ロシア領内で刊行されていた『シューラー』『ワクト』といったテュルク語の定期刊行物上では、すでに一九一四年に、セミレチエ州ガルジャト村[6]に住むナザル＝ホージャなる人物が、「ウイグルの子」（*Uyghur balasi*）というペンネームを使用しています。それより以前、『シューラー』『ワクト』には、古代ウイグルの歴史と言語に関する論説が掲載されており、それに触発されてナザル＝ホージャは「ウイグルの子」を用いるようになったと考えられます［大

石二〇〇三]。ナザル＝ホージャの着想と、「回子」を「回紇」の後裔と位置づける認識の間に、直接的な関連性は見いだしがたいですが、新疆のテュルク系ムスリム、特に清朝宮廷とつながりをもっていた王公ら有力者層に、清朝側の認識を受容していた者が存在した可能性はあると考えます。

では一方で、中央アジアの人々は、清朝あるいは清朝皇帝に対して、どのようなイメージをもっていたのでしょうか。当初、中央アジアのムスリム住民には、ジューンガルを滅亡に追い込んだ清朝権力の到来を歓迎する向きがあったようです[Ibragimov 1969: 422]。ところが、清軍が続けてカシュガリアのムスリム居住地域を征服し、カシュガル＝ホージャ家の指導者を殺害に追い込んだことは、現地ムスリムに大きなショックを与え、警戒心を巻き起こすことになりました。例えば、ドゥッラーニー朝の創始者であるアフマド＝シャー＝ドゥッラーニー（在位一七四七―七二）の提唱のもと、異教徒たる清朝に対して、中央アジアからアフガニスタンにわたるムスリム「同盟」の結成が呼びかけられました。また、現地の支配者のなかには、清朝への聖戦（ジハード）を唱える人物もいました[Valikhanov 1985: 136–137, 323–324]。強大な清朝権力の突然の出現は、中央アジアの人々の心理に清朝に対する畏怖のイメージを植え付け、それは新疆における清朝の統治が弱体化した一九世紀においても、なお中央アジアの人々の行動パターンを規制するところがあったといわれています[Newby 2005: 43–44, 121, 156]。

なかでも問題となるのは、清朝統治下に置かれたカシュガリアのムスリムたちです。彼らにとって清朝の支配とは、異教徒・異民族による支配にほかなりませんでした。「異教徒の王」の支配下から脱却し、イスラームの支配者のもと、イスラーム法によって統治される領域である「イスラームの家」（ダール＝アル＝イスラーム）を実現することは、ムスリムにとって普遍的な目標でした。当然ながら、清朝支配からの脱却を目指す考え方は存在しており、その急先鋒が、中央アジア西部に逃げのびたカシュガル＝ホージャ家の子孫たちでした。し

かしその一方で、現地ムスリムの間には、たとえ「異教徒の王」であれ、「公正なる統治」を実現してくれる清朝皇帝には信頼を寄せ、その恩義には忠誠をもって報いるべきであるという考え方を持つ人々がいました［濱田一九九四］。彼らは理想と現実の狭間において、微妙なバランスの上に立っていたといえるでしょう。

では、中央アジアの人々は、世俗的な意味で、清朝皇帝をいかなる存在として把握していたのでしょうか。ジューンガル征服直後の一七五七年、清のヌサン使節団がカザフ中ジュズの有力者アブライの幕営に到来します。その時の記録によれば、アブライは使節に対して「日が昇る方角にいる満洲のハンは強大である。日が沈む方角にいるフンカルのハン（オスマン皇帝）も強大である」と述べたといいます。二年後、コーカンドのイルダナもアブライと同様の見解を別の清朝使節に対して口にしています。中央アジアの支配者たちは、東方に君臨する清朝の満洲人皇帝を、西方のオスマン皇帝に比肩する強大な君主とみなしていたようです［小沼二〇〇八］。

清朝皇帝が、漢人ではなく、満洲（マンジュ）人であったという点も注目されます。テュルク系諸民族の間には、自らをノアの三男であるヤペテの息子「テュルク」の子孫とみなす系譜意識がひろく受け入れられていました［小笠原二〇一四］。満洲人の起源に関して、ムッラー＝ムーサーが『ハミード史』のなかで、一つの興味深い見解を紹介しています（傍線は筆者が付したもの）。

> 神の預言者ヌーフ（ノア）の息子、ヤフェス（ヤペテ）の一一人の息子を別々に述べていたら、我々の言葉が長く延び、この簡明さが重くなってしまう。我々の目的は一一人のうちテュルクの息子たちの部分だけを述べる［ということであり、その］目的のため、テュルクの子孫についてのみ記そう。テュルクを、いくつかの歴史書ではヤフェス＝オグラン（ヤペテの息子）と呼び、キューマルス[7]と同時代人と述べてい

る。総じてテュルク、モグール、タタール、キプチャク、ウイグル、マンジュ、ナイマン、チルケス、ダチン、ダゲスタン、トルグート、ノガイ、バルラス、チョラース、ジャライル、ディリン、ジュルジュト、ヤイジュイ、マイジュイなどの数千の部族と数千の氏族があり、その集団の血脈はヤフェスの息子テュルクに連なるのだ［TH/Z: 15; TH/Ä: 52］。

当時の中央アジアにおいて、以上の言説がどこまで受け入れられていたのか不明ですが、[8] ここでは観念的に満洲人を自らの系譜意識のなかに取り込み、同じく「テュルク」の子孫に位置づけています。さらに二重傍線を引いた「ダチン」（＝大清）について、ムッラー＝ムーサーは、

モンゴル人の子孫たるマンジュ人に属する太宗（ホンタイジ）の息子、シュンジル（順治）という者に王冠と王権をまとわせ、北京で即位させた。現在に至るまでのハンたちはみな、この一族に属する。この氏族はダチンと呼ばれている［TH/J: 10b–11a; TH/Z: 27; TH/Ä: 75–76］。

と述べ、「ダチン」を「マンジュ」から出た清朝皇帝を輩出する一族――すなわちアイシン＝ギョロ氏族――と紹介しています。満洲人をモンゴル人の子孫とする誤解が示すように、中国本土とその支配者に関するムッラー＝ムーサーの知識にはかなりの混乱と矛盾がみられますが［濱田一九九四：一三八］、清朝皇帝が満洲人の出自をもつことは、カシュガリアのテュルク系ムスリムの間で一定の共有を獲得していたといえるでしょう。この意味において、対中央アジア政策の場から「漢文化（中国文化）にかかわる側面を意識的に排除」するという清朝

政権の戦略は、それなりの効果を生んでいたといえるかもしれません。

他方、清朝皇帝が統治する国あるいは地域は「チーン」と呼ばれ、ゆえに皇帝は「チーンのハーカーン」(*Khāqān-i Chīn*) と呼ばれていました。「ハン／ハーン」と同様、「ハーカーン」も君主を指す称号でしたが、正確には両者の間に違いがありました。ムッラー＝ムーサーも述べているように、「ハーカーン」とはモンゴル語の「カアン」が訛ったものであり、それは元来「ハーンのなかのハーン」あるいは「シャーのなかのシャー」(いずれも「王のなかの王」という意味) を意味していました [TḤ/Z: 23; TḤ/Ä: 68]。ただし、一九世紀中頃に清朝統治下のカシュガルで著されたテュルク語の歴史書では、「チーン」の領域はカシュガリア地域の外側に位置する空間として設定されているのです。このことは、カシュガリアのムスリムにとっての清朝による支配とは、清朝皇帝への人的な帰属を意味するものであり、彼らの間に自らの土地が「チーン」の一部であるという認識がほとんど存在していなかったことを示唆しています [新免二〇〇九：一一九―一二〇]。

むすびにかえて

本講演では、清朝と中央アジアの相互認識にかかわる問題をいくつか紹介してきました。一八世紀中頃に出会うことになった清朝と中央アジア世界は、それぞれが具有する世界観や思い描くヴィジョンのなかで、新たなる隣人の位相を見定めていきました。両者の対話において鍵となってくる文書の翻訳のレベルにおいても、そのような作為は、ことさら問題とならないほど、常態的に存在していました。本講演で示した見解の多くは、なお結論的なものではありませんが、清と中央アジアの関係を再考する上での新たな視点は提供できたのではないかと

思います。そして、このような「異人」認識にひそむ政治性は、清と中央アジアの関係にとどまらず、歴史上、そして現代においても、あらゆる場面で発揮されていることを、私たちはあらためて認識しておく必要があるでしょう。

最後に余談ながら、清朝における新疆の位置づけの変遷について述べておこうと思います。本講演で述べたように、乾隆朝の文化プロジェクトを通じて、清朝政権内では「新疆＝祖宗偉業の地」というセオリーが確立しました。一八二六年にカシュガル＝ホージャ家に属するジャハーンギール＝ホージャがカシュガリア西部に侵入し、その地を半年間占領しました。この時も清朝政府は、このセオリーにもとづいて軍隊を派遣し、新疆の支配を回復しています。その後、一九世紀後半における領土の割譲と国境の画定は、清朝の版図にそれまでにない明確な輪郭を与え、その伝統的な空間認識のあり方に変容を迫ることになりました。一八六〇年代に勃発したムスリムによる大規模な蜂起、およびそれに続くヤークーブ＝ベグ政権の樹立は、一世紀にわたって続いてきた当地域における清朝の統治を、一時的に失わせることになりました。一八七一年にヤークーブ＝ベグ宛に送付されたハミ辦事大臣文麟の書簡には、新疆は本来清朝の「国家版図」（＝清朝の支配領域）なのであり、征服地をすべて返還すべきであるとの主張が展開されています［新免・小沼二〇一二：二六―三〇］。その後、新疆回復を主張した左宗棠は、その理由について、内陸から迫り来るロシアの脅威を念頭に置きつつ、「新疆を重んじるのは蒙古を保つためであり、蒙古を保つのは京師（北京）を保つためである」［『左文襄公全集』奏稿巻五〇：七五―七八］と述べています。つまり、新疆をロシアの侵入から版図を防衛するための最前線に位置づけているのです。さらに左宗棠は、歴史的な観点から、「〔新疆の〕カシュガルとは、いにしえの疏勒国であり、漢代にはすでに中華に属していた。もとより我々の旧き土地なのである」［『光緒宮中檔』一：六二四］と主張しています。さらな

る議論が必要でしょうが、以上のような清朝における新疆の位置づけにかかわる言説の推移からは、現在の中華人民共和国政府にも受け継がれる、「古来新疆は中国の不可分の領土である」という公的な政治見解の形成プロセスを見てとることができるのではないでしょうか。

［付記］本講演は、英文で執筆した［小沼二〇一四B］をもとにしている。講演録という性格上、註記や参考文献の提示は最低限にとどめた。［小沼二〇一四B］はウェブ上で公開（http://www.saksaha.org/）されているので、ご関心がある方はご覧いただきたい。

註

（1）本講演で使用する「中央アジア」は、主にアフガニスタン北部、パキスタン北部、旧ソ連領五共和国（カザフスタン・ウズベキスタン・クルグズ・タジキスタン・トルクメニスタン）に中国新疆を加えた範囲（「歴史的中央アジア」）を指す。

（2）現在の理解では、大宛はフェルガナ盆地にあったと考えられている。

（3）唐の元和元年（八〇六）にウイグル可汗国の使節にマニ僧が随行して来朝し、翌年に河南府（洛陽）と太原府にマニ教寺院を建設したという史実にもとづく。

（4）ここでの「異端の教え」とは、「三教（仏教・儒教・道教）以外の教え」という意味である。

（5）その後新疆においては、ソ連の民族政策を範としていた盛世才政権が一九三五年の省内在住民族の区分確定時に「ウイグル」（漢字表記は「維吾爾」）を公式採用した。

（6）ガルジャトはもともと清朝領内に位置したが、一八八一年のサンクトペテルブルグ条約（イリ条約）によってロシア領となった。

（7）『シャーナーメ』に登場する古代イランの帝王。

（8）奇妙なことに、『ハミード史』の別写本（ルンド図

書館ヤーリング＝コレクション Prov. 163）では、「ウイグル」・「マンジュ」・「ダチン」が登場せず、「ダチン」の部分に「カルマク」（オイラト）が挿入されている［TH/J, 5b］。

参考文献

Brophy 2013: David Brophy, “The Junghar Mongol Legacy and the Language of Loyalty in Qing Xinjiang,” *Harvard Journal of Asiatic Studies* 73 (2): 231–258, 2013.

『高宗実録』：慶桂等奉勅纂輯『大清高宗純皇帝実録』一五〇〇巻、嘉慶一二年［一八〇七］。

『光緒宮中檔』：国立故宮博物院編輯『宮中檔光緒朝奏摺』二六冊、台北：国立故宮博物院、一九七三―七五年。

濱田一九九四：濱田正美「塩の義務」と「聖戦」との間で」『東洋史研究』五二（二）：一二二―一四八頁、一九九四年。

Ibragimov 1969：S. K. Ibragimov, N. N. Mingulov, K. A. Pishulina, and V. P. Yudin, *Materialy po istorii Kazakhskikh khanstv XV–XVIII vekov: izvlechenii iz persidskikh i tyurkskikh sochinenii*, Alma-Ata: Nauka, 1969.

馬・郭一九八四：馬大正・郭蘊華「《康熙論阿玉奇汗敕書》試析」『民族研究』二（一九八四）：一八―二三頁。

馬・馬一九八八：馬汝桷・馬大正「試論《雍正論土爾扈特汗敕書》与満泰使団的出使」『民族研究』一（一九八八）：七九―八六頁。

Newby 2005：Laura Newby, *The Empire and the Khanate: A Political History of Qing Relations with Khoqand c. 1760–1860*, Leiden: Brill, 2005.

大石二〇〇三：大石真一郎「テュルク語定期刊行物における民族名称「ウイグル」の出現と定着」『東欧・中央ユーラシアの近代とネイション』Ⅱ、四九―六一頁、札幌：北海道大学スラブ・リサーチセンター、二〇〇三年。

小笠原二〇一四：小笠原弘幸『イスラーム世界における王朝起源論の生成と変容：古典期オスマン帝国の系譜伝承をめぐって』東京：刀水書房、二〇一四年。

小沼二〇〇八：小沼孝博「“控噶爾国”小考：一八―一九世紀欧亜東部奥斯曼朝認識之一端」『民族史研究』八：一五三―一六三頁、二〇〇八年。

小沼二〇〇九：Onuma Takahiro, *250 Years History of the Turkic-Muslim Camp in Beijing*, Tokyo: The University of Tokyo, 2009.

小沼二〇一〇：Onuma Takahiro, “A Set of Chaghatay and Manchu Documents Drafted by a Kashgar Hakim Beg in 1801: A Basic Study of a ‘Chaghatay-Turkic Administrative Document’,” in *Studies on Xinjiang*

Historical Sources in 17–20th Centuries, ed. James A. Millward *et al.*, Tokyo: Toyo Bunko, 2010, 185–217.
小沼二〇一四A：小沼孝博『清と中央アジア草原』東京：東京大学出版会、二〇一四年。
小沼二〇一四B：Onuma Takahiro, “The Qing Dynasty and Its Central Asian Neighbors,” *Saksaha: A Journal of Manchu Studies*, 12: 33–48, 2014.
小沼・河原・塩谷二〇一四：Onuma Takahiro, Kawahara Yayoi, and Shioya Akifumi, “An Encounter between the Qing Dynasty and Khoqand in 1759–1760: Central Asia in the Mid-Eighteenth Century,” *Frontier of History in China*, 9 (3): 384–408, 2014.
朴一九九六：朴趾源撰『熱河日記』北京：北京図書館出版社、一九九六年。
東博二〇一二：東京国立博物館ほか編『北京故宮博物院二〇〇選』（展示会図録）東京：東京国立博物館・朝日新聞社・NHK・NHKプロモーション、二〇一二年。
Perdue 2005：Peter Perdue, *China Marches West: The Qing Conquest of Central Eurasia*, Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, 2005.
『平定準噶爾方略』前編五四巻、正編八五巻、続編三二巻、傅恒等奉勅纂輯、乾隆三七年［一七七二］。
『欽定皇輿西域図志』五二巻、傅恒等奉勅纂輯、乾隆四七年［一七八二］。
佐々木二〇〇〇：佐々木揚『清末中国における日本観と西洋観』東京：東京大学出版会、二〇〇〇年。
新免二〇〇九：新免康「『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の叙述傾向に関する一考察：カシュガルの歴代ハーキム・ベグの部分を中心に」『西南アジア研究』七〇：一一一―一三二頁、二〇〇九年。
新免・小沼二〇一二：Shinmen Yasushi and Onuma Takahiro, “First Contact between Ya ‘qūb Beg and the Qing: The Diplomatic Correspondence of 1871,” 『アジア・アフリカ言語文化研究』八四：五―三七頁、二〇一二年。
Sungyun 1982：Sungyun, *Emu tanggū orin sakda i gisun sarkiyan*, San Francisco: Chinese Materials Center, 1982.
TḤ/Ā：Mulla Musa Sairami, *Tarikhi Hāmidi*, ed. Ānwār Baytur, Beijing: Millātlār nāshriyati, 1986.
TḤ/J：Mullā Musā Sayrāmī, *Tarīkh-i Ḥamīdī*, Lund University Library, Jarring Collection, Prov. 163.
TḤ/Z：Mullā Musā Sayrāmī, *Tārīkh-i Ḥamīdī*, 甘粛省古籍文献整理編訳中心『中国西北文献叢書・二編』第四一冊、一―四一五頁、蘭州：線装書局、二〇〇六年。
Valikhanov 1985：Chokan Valikhanov, *Sobranie sochinenii*

v piati tomakh, tom 3, Alma-Ata: Glavnaia redaktsiia Kazakhskoi Sovetskoi Entsiklopedii, 1985.
Waley-Cohen 2006：Joanna Waley-Cohen, *The Culture of War in China: Empire and the Military under the Qing Dynasty*, London: I. B. Tauris, 2006.
昭槤一九八〇：昭槤撰、何英芳点校『嘯亭雑録』北京：中華書局、一九八〇年。
左一九七九：左宗棠撰『左文襄公全集』六冊、台北：文海出版社、一九七九年。